



中央大学の運動場の歴史

— 中野運動場から所沢運動場、 そして練馬運動場へ —

中央大学のキャンパスの歴史は、戦前、神田錦町（東京都千代田区）から駿河台（同区）へとつながる。本学は都心に立地していたことから、運動場を校地内に確保する余裕はなかった。そのため運動場はキャンパスとは異なる場所に設けられることになった。今回は戦前に開設された運動場の歴史を緋いてみたい。

運動場の誕生 — 中野運動場から所沢運動場へ —

中央大学に初めて運動場が誕生したのは1911（明治44）年のことだ。場所は武蔵野の面影の残る中野（東京都中野区）、その麦畑約6,600㎡を借りたのが始まりだ。この年には学友会が発足し、競走会（陸上競技部）などの利用も期待された。だが、中野運動場には付属施設もなく、結局その利用は年に一度の運動会にほぼ限られていた。

そこで、学友会体育部の活動などのため新たな運動場が求められるようになり、本学は1926（昭和元）年に約3万円を投じて所沢（埼玉県所沢市）の山林や畑約32,700㎡を購入し、400mトラック、200m直線走路、テニスコートなどを備えた自前の運動場を設けた。

ところが、この所沢運動場には野球会（野球部）、ラグビー蹴球会（ラグビー部）、ア式蹴球会（サッカー部）などの練習場がなかったため、それらの部会は依然として練習場探しに苦慮し、また競走会も練習場所を駒場の東京農業大学のグラウンドを借りて行なうなど、当初期待していた利用にはほど遠かった。この年、本学は神田錦町から駿河台に移転し、都心から所沢運動場までの移動が大きな障害となっていたのである。

練馬運動場の開設とその終焉

利便性のより高い場所に新たな運動場を設けることが課題となった本学は、1937（昭和12）年「学生生徒ノ競走、ア式ラ式蹴球、籠球、庭球、水泳ノ諸競技綜合練習運動用」地として板橋区練馬南町（練馬区練馬）の約49,500㎡の田畑を約7万円で購入した。

そして、翌1938年8月30日に落成したのが練馬運動場であった。この運動場内には当初予定されていた籠球（バスケットボール）と水泳の練習施設は設けられなかったが、約13,200㎡の蹴球場や第3種公認400mトラックまたテニスコートが整備され、さらに観覧用のスタンドなども設置された。

同年10月17日、練馬運動場落成記念競技大会が催された。10月30日付中央大学新聞第153号は「爽涼のグラウンドに和気霽々青春の華開く」の見出しで、その時の模様を伝えている。

それによれば、大会のトラック競技は100m走に始まり百足競走や二人三脚、部科対抗リレー、俵垣競走などが行なわれた。1,500m走では2年前のベルリンオリンピックで活躍した村社講平（むらこそこうへい）選手の特参加が伝えられると場内には拍手の波が湧き起り、同選手の快走で大いに盛り上がったという。一方、フィールドでは走り幅跳びや砲丸投げなどの熱戦が繰り広げられ、蹴球場では学内対抗7人制ラグビーが行なわれた。

またトラックでは番外編で3、4歳の幼児数十名による「お子様競走」があり、その愛嬌たっぷり走りぶりに満場やんやの喝采、来賓の提灯競走、役員のリレーへと続いて庭球戦を最後に競技会は幕を閉じた。中大新聞はこの日の競技会を「今日に映るのは不安と懐疑を超越した若人の意気と熱と『生命の飛躍』そのものである」と総括している。

戦後、練馬運動場には1950年代から1960年代にかけて馬術部の馬房、体育部宿所そして体育部女子宿所が相次いで建設され、施設の充実が図られた。

1938年に開設された練馬運動場は、1976（昭和51）年10月17日に催された陸上競技、ラグビー、サッカー、ハンドボール、馬術、女子陸上競技各部合同による関係者約1000人が集った「練馬運動場サヨナラ会」をもって38年の歴史に幕を下ろした。多摩移転の2年前のことであった。

練馬運動場は中央大学の駿河台時代とともにあった体育実技授業、体育関連の学校行事そして学友会体育部の学生スポーツを名実ともに支え学生たちに慣れ親しまれた思い出多き屋外運動施設であったのである。



1938年10月17日
練馬運動場落成記念競技大会会場の飾り付け



100m走スタートダッシュ